

## 津軽版・弥次喜多道中記

### 『御国巡覧滑稽噺盡戯』

【問合せ】  
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

江戸時代は「旅の時代」といわれています。旅行記や名所図会など庶民の旅心をくすぐる書物が広く板行され、これらを手にした人々は名所めぐりの旅に出ました。

さて、万延元年（一八六〇）に弘前松森町の「瓢舎半升」という人物が『御国巡覧滑稽噺盡戯』（以下、『噺盡戯』）を著します。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を連想させるこの物語は、弘前生まれの弥太八と江戸っ子の喜次郎兵衛が津軽領内を旅し、その旅路の最後が青森町となります。この津軽版「弥次喜多道中記」を読みながら、「江戸時代の青森町」への旅と洒落てみることにしましょう。

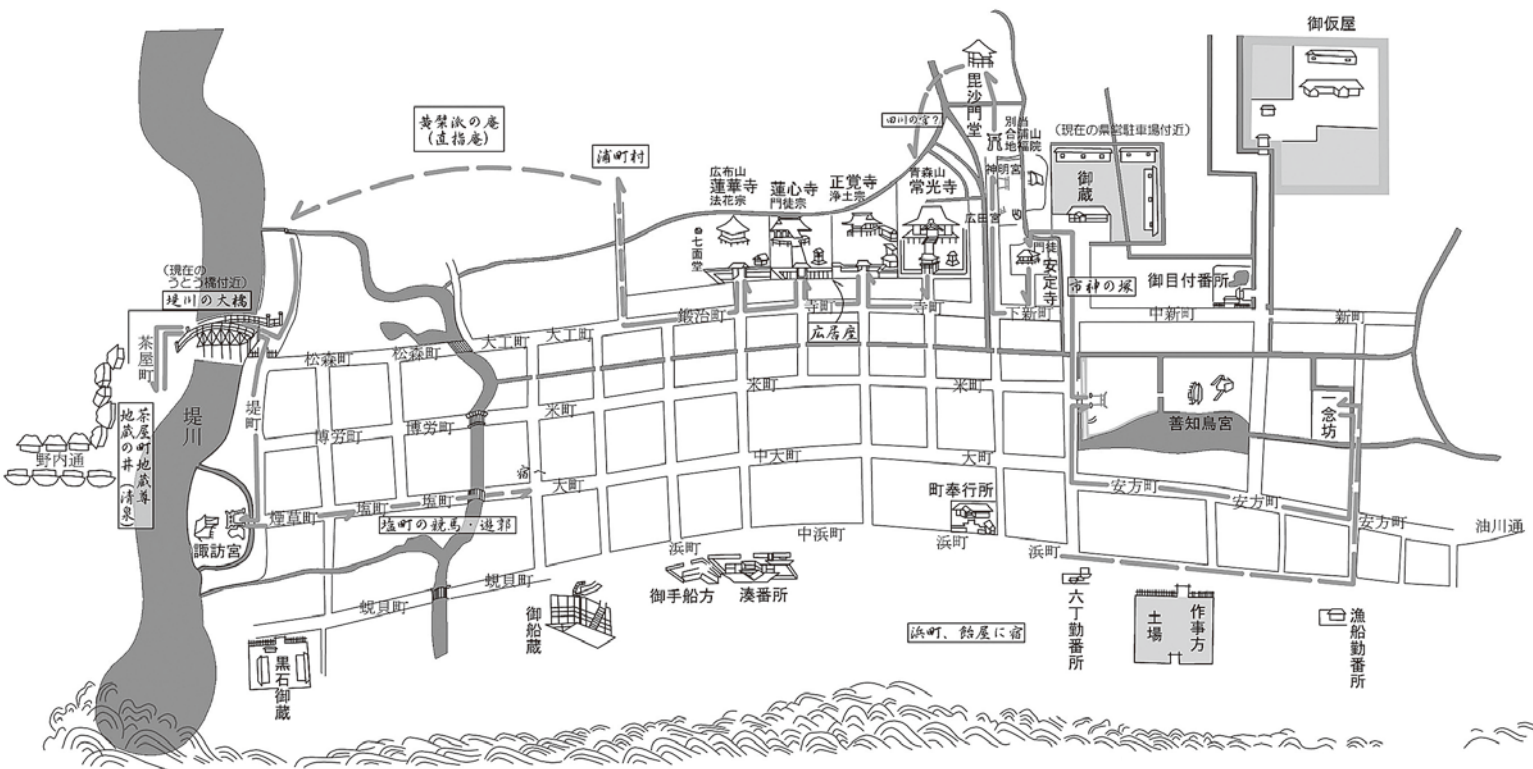
#### 浅虫から青森町へ

四月六日、ふたりは浪岡村で知り合った、仙台塩釜生まれの権十郎とともに浅虫村の九十郎のもとに宿を取ります。九十郎は実在する人物で、八坪



【写真1】島めぐりの目玉スポット湯の島の材木岩（市史編さん室蔵）

の湯小屋と湧湯を一つ持っていました。翌日、権十郎と別れ、ふたりは当時の浅虫観光の目玉のひとつ「島めぐり」に、お酒好きの船頭の案内で出掛けます【写真1】。その後船は、浅虫村を離れ青森町へと向かい、浜町の船屋という宿にふたりを案内しました。宿では青森の名酒「赤鬼の水入らず」を愉しみ、夜着をかぶって眠りにつきました。



【図1】弥太八・喜次郎兵衛の青森町めぐり（文政9年（1826）の青森町絵図をベースマップとして作成）

## 市神の塚

翌四月八日の朝は、湊に碇泊していた船が碇を巻き上げる音などで目を覚ました。四月八日」という日付けは、この旅物語にとって大きな意味があります。それは最後のお楽しみ。

さて、身支度を整えたふたりは、青森町めぐりを始めます【図1】。浜町・安方町辺りをぶらついた後、一念坊（一念寺）、そして、善知鳥宮（善知鳥神社）に立ち寄りませす。ただ、善知鳥宮には来訪者による記録が多く残っているからと、『噓盡戯』では多くを語りません。

さらに南へ行き新町との交差点に出ます。ここには、「市神の塚」がありました。町の人はこれを「市神の神木」と呼び、周囲には柵が廻らされています。ほかの記録によれば、寛文年間（一六六一—一七三）に新町が町立てされた後、ここに市が置かれた際に祀られたご神木であったともいいます。ここで注目すべきは、七夕祭りの日には町中のネブタがこの辺りに一度集まり、そこから列を正して各町々へ繰り出したとあるくだりです。これについては、明治初年の記録に、人々は本来「市神」であったことなどすっかり忘れてしまい、七夕祭りの際のネブタに「関わるご神木だと認識し、「柵機神」と呼んでいたとあります。

## 寺町の四か寺めぐり — 金毘羅堂の鬻・芝居小屋

それからふたりは安定寺、さらに柳町にあった青森町の総鎮守毘沙門堂をめぐり、次に常光寺・正覚寺・蓮心寺・蓮華寺と四か寺を訪ねます。ここでは、ふたつのエピソードをご紹介します。

まず、裏道（南側）から常光寺に入ると、右手に「金毘羅堂」があるといえます。ここには、海が荒れた時に船乗りたちが鬻を切つて航海の安全を祈り、無事青森の湊に着くと、感謝の気持ちを込めてその鬻を奉納したとい



【写真2】大正初期 塩町「歌舞伎座」（市史編さん室蔵）

たくさん鬻が掛かっています。こうした鬻の奉納は、「風待ち湊」で知られる深浦町の円覚寺にある鬻額が有名です。やはり湊町である青森町でも同じようなことがあったのです。

もうひとつは、正覚寺から蓮心寺へ向かう途中、ふたりは「広居座」で芝居を観ています。青森町で芝居といえ「歌舞伎座」に代表される塩町界限（青柳二丁目）を思い浮かべるかたもいることでしょう【写真2】。実は、青森町での芝居文化の嚆矢は寺町だったのです。

さらにふたりは、蓮心寺で後に「見返りの松」と呼ばれることになる「古樹」に感激し、蓮華寺では鐘楼にのぼり青森の町を展望しています。

## 塩町の競馬

### 「四月八日」のナゾを解く

四か寺をめぐった後、ふたりは堤川へ向かいます。堤川沿いの道は並木道でした。茶屋町の地藏堂、さらには堤川の中州にあった「諏訪大明神（諏訪神社）」を参拝し、塩町に向かいます。

さて、手前の葭町から塩町の方を見ると、土煙が舞い上がり、勇ましい「エイヤア」の掛け声が聞こえてきました。加えて、そこに集まる群衆のヤンヤの歓声は、こだまとなって響きま

塩町の「競馬（馬の曲乗り）」のようすです。奇抜な衣装に身を包んだ乗り手が、いろんな曲乗りを競います。「競馬」自体は津軽各地で行われていましたが、青森・黒石・木造のものが「最上」であったといえます。

そうす、『噓盡戯』が四月八日という日付けで青森町での物語を構成したのは、この「競馬」を取り上げるためだったのです。塩町の「競馬」は、青森町を代表する年中行事だったので

## 旅の終わりに

「競馬」を見物したふたりは、塩町の遊郭で春の珍味「がさ葱び」や野内の「シラヲ（シロウオ）」などを肴に杯を傾け、宿屋の館屋に戻りこの物語は終わります。

宿で眠りに着く前に、弥次八は喜次郎兵衛に次は上磯方面の旅を提案します。ふたりの旅が、まさに「御国巡覧」となればよかったのですが……続きは夢の中ということに。

ここでは、『噓盡戯』のほんの一部しか紹介できませんでしたが、ふたりの旅については、『新青森市史』通史編第二巻第七章のほか、毎週金曜日に配信しているメールマガジン「あおもり歴史トリビア」でも紹介しておりますので、こちらも是非ご覧ください。

（市史編さん室長 工藤大輔）